



Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2022.12.01

亡き人から案じられている

道因寺住職 相馬 豊

昨日までは十月といえど非常に暖かい日が続いていましたが、今日は一変して、ちよつと肌寒い日になりました。朝方から雨が降ったり止んだりしてだんだん北陸の冬が近づいてきているなどそんなことを思いながら、浄光寺さんの報恩講に足を運んで参りました。本日もどうかよろしくお願い致します。

亡き人

先ほど控室でお話をしていたの

ですけど、あの人も亡くなり、この人も亡くなり、本当に身近な友人人が亡くなっていくという寂しさを今年も味わっています。そういう親しい友人が亡くなって逝ったと聞くとついつい口ずさんでしまう短いお言葉があります。それは榎本栄一さんという方が作られた、次のお言葉です。

あの人も逝き

この人も亡くなり

遠い山のお寺の鐘のような

かすかな余韻が

私のこころにしみる

こういう短い詩を榎本栄一さんという方が綴られました。「あの人も逝き、この人も亡くなり」と、親しい人を亡くすついつい榎本さんのお言葉を口ずさんでいるのですが、何か私の中に確かな記憶としてですね、出会った方々の姿がですね、今も常に私の心に余韻として宿っているなどということがあります。

その親しい友人を亡くしていったことを踏まえながら、東田直樹さんという方が短いお言葉でこんなことを語り掛けてくださっています。

人生を生ききる。残された人はその姿を見て自分の人生を生き続ける。

この東田さんのお言葉に出会ってですね、改めて亡くなっていった友人が正に人生を生ききったのだなと気づかされた。残された私たちが

は、その生前の姿、生き様、それを見て色んなことをもう一度ただき直していく。「自分の人生を生き続ける」というこの東田さんのお言葉が、余計に私に亡くなった人と共に生きていくということを考えさせられるお言葉です。

亡くなった方というのは身近な人だけではなくて、この報恩講でしたら、宗祖親鸞聖人。あるいは親鸞聖人の教えを聞かれた蓮如上人、あるいは多くの有縁の方々。そういう方々お一人お一人が今の自分を支えてくださっている様な気が致します。

京都の東本願寺、真宗本廟に参拝接待所というところがございます。その参拝接待所の仏間の左側の柱にこういう言葉がかかっております。

亡き人を案じる私が、亡き人から案じられている

こういう短いお言葉が参拝接待所

の仏間に掲げられています。

私たちも大切な人を亡くしてしま
うと後に残った者としては、もう少
し色んなことをしてあげればよかつ
たかな、あるいは色んな言葉を掛け
合っていくような関係が作れたはず
なのにとか、亡くなってから色んな
ことが次から次へと思い起こされて
きます。なかなか生前ではそのこと
が叶わなかったから、あの時こうし
ていればと、余計に色んなことが
過^よっていくわけです。正に私たちは
亡き人を案じている。亡くなった人
を案じている身だということは私も
そうです。だからこそ、そこで後に
残ったものとして何がきるだろうか
ということが思い浮かぶわけです。

す。その方のご法事を勤めていく。

日にちを決めてそしてお寺さんに来
ていただく。有縁のご親族に来てい
ただく。そして迎える側はお内仏^{ないぶつ}の
莊嚴^{しょうげん}を整えていく。そういういくつ
かの過程を経てご法事を勤めていき
ます。

そのご法事を勤める時に、まず、
最初に伽陀^{かた}というものが上がりま
す。その後に表白というものが毎回
ご拝読されます。例えばその表白の
一文の中にこういう言葉が綴られて
います。

表白

く さ む す び
とすることが思い浮かぶわけです。

本日ここに

〇〇院釋〇〇／釋〇〇の〇〇回忌

法要にあたり

有縁のひとびと相よりつどい

亡き人を偲びつつ

如来のみおしえに遇いたてまつる

その時に私たちが執り行うことで
思い浮かべることができるとの一
つが供養ということがです。亡く
なった方に対して供養をするという
ことです。その具体的なかたちがご
法事を勤めるということかと思いま

こういうお言葉が表白の冒頭に載つ
ております。そうしますと、ご法事
を勤めるというのは、後に残った私
たちが先に亡くなった方に対して何

かをするということではなくて、亡
くなった方々が、その何回忌の法要
に合わせて私たちに「大切なことを
どうかもう一度聞き直して欲しい」

と、その時間や場という縁を作つて
くださっているのではないでしょう
か。亡くなった方が後に残った私た
ちに一つの縁を作ってください。私
それが「亡き人を偲びつつ 如来の
みおしえに遇いたてまつる」と、こ
の言葉の中に集約されているのでは
ないでしょうか。

私たちは先に亡くなった方に対し
て供養というかたちでご法事を勤め
る。しかし、終わった後ですけれど、
よくこういうお言葉を耳にすること
があります。「前々から気になってい
たご法事を今日無事に勤めることが
できました。やれやれほつといたし
ました」。こういうお言葉を言われ
る方がおられます。これを聞きます
と、正直なお気持ちだと受け止め
ます。誰もが持つお気持ちですよ。

しかし、「やれやれほつと」と終わる
だけでなくて、やはりこの「如来の
みおしえに遇いたてまつる」、ここを

忘れてしまうと大事なご法事となつ
ていけないのではないのでしょうか。

例えば、今年は親鸞聖人が亡くな
られて七五九年です。毎年毎年、報
恩講というご法事を勤めているとい
うことです。親鸞聖人のご法事を毎
年毎年私たちは報恩講という名のも
とでお勤めしている。それは親鸞聖
人という方を偲びつつ、ここに集つ
た私たちが如来のみ教えにあわせて
いただく。親鸞聖人の九十年の生涯
を偲びつつ、その親鸞聖人が歩まれ
た九十年の生涯を通しながら、何が
親鸞聖人の課題であったのか、その
ことを今現代に生きている私たちが
もう一度自分の生き様、在り方を
親鸞聖人や蓮如上人のお言葉に耳を
傾けながら確かめていく。そういう
ことがこの報恩講を勤めていくとい
う大切な意味合いではないでしょう
か。

そうしますと、供養ということ
も、先ほど申しましたけれど、お寺
さんに来ていただいて読経するとい
う供養、あるいは御仏前にお供えを

する供養、お内仏の莊嚴をきちんと整える莊嚴供養、何か三つがバラバラのように受け止められていますけれど、実は三つが全部で一つのこととして表されます。それは尊敬です。

亡き人と私との関係性がどういったものであったのか、そこに尊敬という言葉を抜きにしてご法事を勤めるということは出来ないと思えます。尊敬の念を持つ、敬う、尊ぶという事です。その敬う、尊ぶという時はただ敬う、尊ぶのではなくて、そこにあるのは東田さんの「その姿を見て」というお言葉が当てはまるのではないのでしょうか。

父親の姿

私も今年、父親と母親の三回忌の法要を勤めました。丸々二年経って三回忌の法要を勤めた時、自分の中に父親の記憶を辿っていった時、どういうことを父親は大事にされていたのだろうかということが自分の記憶の中に今も宿っています。記憶というのは過ぎ去った過去

のことはないと思います。過ぎ去らずに今も留まっているもの。私の中に残っているもの。それが記憶ではないのでしょうか。畑で鋤を持って土を耕すように自分の記憶の中にある両親、祖父母、兄弟姉妹、あるいは我が子との関わりを振り返ると、色んなことが記憶の中から呼び起こされてきます。そこに姿というものが浮かんでくるのではないかと思えます。

父の姿を思い出した時に、色々なことが思い起こされます。遊んでもくれましたし、色々なことを教えてくれたということもあります。しかし、私の中で一番強く記憶に残っている父親の姿は何かと申しますと、小学校時代、中学校時代、部活を終えて帰宅すると、父親は机の前に座っているということがありました。そしてその父親が座っている机を見てみると、何が置いてあるかといいますが、新聞紙が置いてある。そしてその横にはハサミが置いてある。そしてその切り抜いた新聞を張り付けたノートが何冊か置いてあ

る。反対側には蓮如上人の御文箱おふみが置いてある。そして親鸞聖人のお言葉を集めたものが置いてある。そして先達が書かれた書物が置いてある。そして自分の原稿用紙が置いてある。現実の生活の中で新聞に載るような記事を切り抜いて、そして改めて親鸞聖人や蓮如上人のお言葉にあたりながら現実と聖典はてまの間に生きていた。何かそういう姿が思い浮かべられます。

そして二年余り、介護福祉施設に入所していたわけですけど、その介護の現場の中で介護職員からこんな質問を受けたことがあります。それは父親が朝目覚めてから夜就寝するまでの間、毎日の様に小さな声でぶつぶつと何かをつぶやいている。介護職員の方が私に、お父さんは何をぶつぶつと言っているのでしょうかと尋ねられた。私たちには分からないのでどうか教えてくださいませんかという質問を受けました。

それで父親がベッドに横たわっている時に、何を言っているのか耳をそばだててみました。そうすると父親がぶつぶつ言っていたのは親鸞聖

人のお言葉でした。それは『歎異抄たんにしやう』というお書物の一番最後の方に出てくるお言葉で、そんなに長い言葉でなく短い言葉です。

そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします

食事の後、入浴サービスの後、あるいはレクリエーションの時、朝目が覚めてから夜寝るまでの間、その言葉をぶつぶつと自分自身に語り掛けるようにしていた。

その姿を見た時、父親というのは生涯お念仏に生き、お念仏を申し、お念仏の教えを聞いた人なんだなあと、自分の記憶の中に蘇ってきました。お念仏を申し、お念仏の教えを聞いた一生だったなあと。

またその姿を見た時、改めて自分はさてどうだろうか、自分はどういう生き方をしているのだろうか、父親の姿がこの私に問いかけてくるわけです。あなたはどうかどう生き方をしているのですかと。改めてその

問いかけの言葉を聞いてみると、恥
ずかしいなという思いの方が強い
です。衣を着て寺を預かっているけ
ど、本当にお念仏の教えに生きてい
るのかなど。お念仏の教えを真摯に
丁寧聞いているのかなど。何かそ
ういうことが改めて自分の生き方、
生きる方向と態度を私に問いかけて
くださっている。

道標

く さ む す び

そうすると私たちにとって先に亡
くなった方々はどのような方々かとい
えば、道標みちしるべですね。私という一人の
人間を導いてくれる人、それが亡き
方々ではないでしょうか。私に生ま
れ生きていくことの道標を教えてく
れた方々。亡き人と共に生きること
が無ければ私たちはいつの間にか傲
慢になって、そして謙虚さを忘れて、
自分が自分とそのことに立ってし
まう。そうすると他共に命という
ものが濁って、大切な命そのものを
見失っていく、自分だけ良ければと
いう処に立っていく。そういう私に



改めて大事なことを道標として教え
てくれるのが、先に亡くなった方々
ではないでしょうか。親鸞聖人、蓮
如上人、あるいは私たちにとって大
切な方々。ただ亡くなった方々では
なくて道標となって一つの方向と態
度を教えて下さっている方々だと思
います。

私たちは、どう生きればいいのか
と道を見失った時、生きあぐねた時、
ふと亡き方々のお名前を呼ぶという

ことはなかったでしょうか。お父さ
ん、お母さん、おじいちゃん、おば
あちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。

ふと自分の生活の中で亡き方々の名
前を呼んだということです。そうす
るとそこには不思議なことが起こり
ますよね。自分もそうです。お父さ
ん、お母さん、呼んでみればちゃん
と今も私の中に父、母は生きていま
す。同時に記憶の中にある父が語っ
た言葉、母親が語ってくれた言葉、
色んな言葉が自分の記憶の中から次
から次へと思い起こされてきます。
じゃあどうしてそういうことが起こ
るのでしょうか。命終えて茶毘に付
し白骨となってしまうばそれでお終
いだと思つています。確かに肉声は
聞くことは出来ないし、暖かい身体
に触れることもできなくなりました
が、名前を呼べば今も私の中に生き
続けている方々がおられる。

それはどうしてなのでしょう。か。
やはり今残っている私というものが
心配でならないからでしょう。お前、
本当に大丈夫かと。一人で生きて行
けるのか。こういうことがあるから
でないでしょうか。ではどうして私

たちのことが心配になっているので
しょうか。

それを訪ねていく時、私たちはあ
ることを確認していくことになりま
す。過去と現在と未来ということに
ついてです。過去、過ぎ去ってしまった
ことです。しかしこの過ぎ去って
しまったことに対して私たちはどう
いうふうに捉えているかというところ、
過ぎ去った過去には納得をしたいわ
けです。現在、只今は満足したいわ
けです。まだ見ぬ未来については安
心したいわけです。これが私たちが
持っている思いそのものではないで
しょうか。過去には納得したい、現
在は満足したい、未来には安心した
い、こういう思いを持ちながら生き
続けています。しかしこれは思いで
す。

過去にどういった思いを持ってい
るのでしょうか。私も過去を振り返
ると痛い思いがいっぱいあります。
それも人に対してです。つまり後悔
です。痛い思いが次から次へと思い
出されてきますから、過去について
は納得どころか後悔の念が多いで

す。

現在は満足どころか不満ばかりです。未来に対しては安心ではなく心配と不安だらけです。これが私というものの現実です。過去には納得どころか今も後悔の念ばかりです。それも人に対して行った行為について。だから夢にまで出てくることもあります。過ぎ去ったことなのに今でも小さな棘とげとなつて後悔の念というのは出てきます。現在に対して出るのは満足どころか不満ばかりです。人に対しても不満、仕事に対しても不満、社会に対しても不満、満足は一つもありません。

く さ む す び

まだ見ぬ未来に対してはこの現実が抱えている不満がありますから、心配でいっぱいです。そして不安だらけです。安心など、どこにもありません。そういう現実を生きているということ。後悔と不満と心配と不安だらけ。

(5)

そんな私だからこそ、亡くなった方々から見れば心配でならないのでしょう。本当にあなた大丈夫ですか、そういう生き方をして、そんな生きる態度を持って、歩もうとしている

ことが本当に大切なのですか？ 伺いかけているのではないのでしょうか。

例えばそのことを蓮如上人の『御文』の言葉で申しますならば、一帖目十一通の冒頭に、蓮如上人がこういってお言葉で私たちに語り掛けられておられます。

それおもんみれば人間は電光朝露ちやうろうの、ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。たといままた栄花えいが栄耀えいようにふけりて、おもうさまのことなりというとも、それはただ五十年乃至百年のうちのことなり。

こういうお言葉です。今から五百二十数年前に亡くなられた蓮如上人。歴史の上でいうならば室町時代に生きられた方です。現代から見れば室町時代は今の時代と大きな違いがあります。科学技術が進歩し、医療技術も進歩し、生活水準も変わってまいりました。しかし、蓮如上人の眼を現代という時代に照らしてみても、全く人間の在り様は一つ

も変わっていないといえるのではないのでしょうか。

「電光朝露ちやうろうの、ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。たといままた栄花えいが栄耀えいようにふけりて、おもうさまのことなりというとも、それはただ五十年乃至百年のうちのことなり」とあつという間に過ぎ去っていく。

私も今年六十五歳になりました。日本人の平均寿命が八十四歳だつたと思います。そうすると残り十九年です。平均寿命まで生きられるとしたら残り十九年しかありません。あつという間に終わりますよ。その間、何をしたのだろうか。成すべきことは何だつたのだろうか。

ぼーっとしていても十九年は過ぎていく。生まれ育つて今も生き続けているけれど、本当に生まれてきた用事が何だつたのか、見つけることななく過ぎ去っていく。あつという間に終わっていく。正に蓮如上人が言う「ゆめまぼろし」の如く終わっていく。しかし東田直樹さんは、「人生を生ききる」と。私たちは、人生を生ききる、というよりもどうで

しようかね。本当に人生を生ききつたと言えるのでしょうか。

私たちは一番大切なことをついつい忘れていくということがあります。それは死すべき身を生きているということを忘れていくということではないでしょうか。死すべき身を生きている。だから生きるということが非常に大切なことであり、生きるということが輝くわけです。その死すべき身だということがついつい抜け落ちてしまう。

そうすると、今日がダメなら明日があるさ。明日がダメなら明後日があるさ。そういう中に身を置けばいつの間にか余裕と油断が生じてしまふ。改めて自分が死すべき身であることを確認する場、それが亡くなった方々を縁としていた法事を勤めるということの意味合いではないでしょうか。ここで一度立ち止まって、自分の今までの生活の在り方や人として生きているこの事実の中で生きていること、亡くなっていくということを確かめてみませんか。

そのことは、親鸞聖人も私たちに『歎異抄』の中で問いかけられました。

われもひと、生死をはなれんところぞ

生まれてきたということは、亡くなつていくということである。始めがあれば必ず終わりがあります。その中で改めて何を大事なこととしていますか。

また親鸞聖人は『教行信証』教巻では次のように問いかけられています。

く さ む す び

何をもつてか、出世の大事なり

私たち一人一人がこの世界に生まれてきたということは大事なことですよ。私たちは大事、大事という言葉は使いますし、知っています。しかし、本当に何が大事かということについての間にか見失ってしまっていることはないでしょうか。

つい先だつても、何気ない日常会

話の中でのことでした。一人暮らしをされているお家にお参りにいきました。お参りをする前にその方がこんなことを言われました。昨晚、テレビが急に映らなくなつてしまいました。朝一番に電気屋さんに来ていただいて見てももらったら、これは古いテレビですよ。修理するよりも新しいものを買った方がいいですよ。こういうことを言われたそうです。その時、私はその方の言われる言葉をそのまま受け止めておりました。ああ、テレビが壊れたのですね、じゃあ新しいテレビを買うのですね、そういう風なお答えをしてみましたのです。そしたらその方がこう言われました。テレビを直すとか買い求めるとかではないのですよ。私は一人暮らしなので、とこう言われたのですね。私は一人暮らしなのでですよ。このお言葉にハッとしましたね。

テレビのことだけが頭に入っていて、テレビを新しくするので、それとて、テレビを新しくするのですねと。そういうことしか思い浮かばなかった。その人が何十年と一人暮らしをされていることを知っていても気が

付かなかつた。気づかないというのは、どういう思いでこの部屋で一人で過ごしているのだろうかというところで。孤独と寂しさ、その方の思いに全く気が付かなかつたということです。テレビのことばかりが目がいってしまつて、その方がどんな思いで毎日一人暮らしをしているかということに対する思いやり、気遣いが全くなかつたということ。孤独ということと一人で寂しさの中で生きているということに対する気づきが無かつたなど。

なんか改めて恥ずかしくなりましたね。人を見ているようで見ていなかったな。自分の都合というところ。でしか判断していなかつたな。ついつい目の前の人がどう思うかという日々の生活をしているかということ。が全く見えていなかつた。本当に恥ずかしいなということ。でいっぱいになつてしまつた。

私たちはあたりまえの様な毎日の生活の中で常に人と関わりを持ちながら、その人がどう思うかという生きているのかということ。を忘れてしま

いがちです。改めて人が生きるということがどういうことなのだろうか。色んなことを抱えながらみんなが一人一人生きています。生きるというこの本質、そのことに目を向けること。自分自身のこと。何かそのことをつい先だつての出来事で、自分はどうしても見えないのだなと、その何気ない会話の中で思い知らされました。

そういう私だからこそ改めて道標が必要なのです。もしこの道標がないと、どこまでたつても自分の都合、自分の価値観でしか物事を判断出来ず、見極めることが最優先になつてしまふ。そういう私の在り方を問いだしていく時、そこには確かな人との出会い、その人との出会いの中で培ってきた姿や言葉というものが非常に大きな意味を持つてくるのではないのでしょうか。

先程冒頭で申しました榎本さんが言われますように、「あの方も亡くなり、この方も逝き、かすかな余韻が私の心に沁みる」、今日まで様々なことをやって参りましたけれど、それ

は過ぎ去ってしまえばやってしまったこと。しかし、それは確かなものではなくて、一番確かなものは、人と出会い、その人が語り掛けた言葉に自分が耳を傾けたと、そしてその人と別れていったと。これほど確かなものはないのではないだろうか。

出会い直す

唯円ゆいえんという方が、親鸞聖人のお言葉を集められて『歎異抄たんにしやう』をお書きになりましたけれど、唯円が歎異抄を書かれたのは、親鸞聖人が亡くなられて二十年後です。二十年前に出会った人の言葉をきちんと耳の底に留めていた。それを書き尽くしたのが歎異抄です。そして唯円は語り掛けられました。ここに書かれた文字は親鸞聖人のお言葉の百分の一にも満たない。でも唯円の書かれたお言葉が親鸞聖人のお言葉として現代を生きている私たちに道を指し示してください。隠れた名書として、皆さんの家にもある歎異抄です。

影のベストセラーとも言われています。どこの家にもなくても歎異抄が必ず置いてある。正に道標でしょう。百分の一にも満たない言葉だけれども、二十年間耳の底に留めた言葉を書き綴ったのが歎異抄。

唯円にとって親鸞という方に出会い、その聞いた言葉が自分が人間として生きていく為の方向と態度を指し示してくれた。それと同じように私たちが先に亡くなった方々からのお言葉や姿、そのことが今の私の人生そのものを支えてくれているのではないのでしょうか。人は別れてお終いではないのです。別れた後、改めて出会い直していくのではないのでしょうか。本当の出会いはそのから始まっていくと私は思います。

改めて出会い直してみたら、大切な言葉が自分の記憶の中に今も宿り、留まっている。例えば父親が亡くなる三日前にですね、何気なく最後に言った言葉が「あと頼む」という言葉でした。最初は「あと頼む」というお言葉を聞いてですね、何を思ったかと言いますと、お寺を頼む、

お寺に足を運んで来られるご門徒さんや有縁の方を頼む、後に残る家族を頼む、こういう風に父親の言葉を受け止めておりました。

しかし、改めて自分の記憶の中にある父親は、先程申しましたように、お念仏の教えを聞き、お念仏を申し、お念仏に生きた人でした。その姿を見た時、父親が亡くなる三日前に言った「あと頼む」というのは、「まずあなたが、お念仏の教えを聞き、お念仏を申し、お念仏に生きる人になつてくれよ」と、そういうことだったのではないのでしょうか。

父の存在の大きさですよ。どれだけ経つても一人の人間として育てていこう、育つて欲しい、何かそういう願いですね。時には反発し、喧嘩もし、ぶつかり合ったけれど、このことが一番大事なことですよ、その生涯で身をもって教えてくれた。残された人はその姿を見て、自分の人生を生き続ける。その姿を見てです。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、あるいは我が子、それぞれ

れの姿。その姿を通して改めて自分がこのかけがえのないこの人生をどう生きていくのかと、逆に亡き方々から私たちは宿題をいただいているのではないのでしょうか。

この歳になつても私たちは宿題をいただいているのです。その宿題を本当に果たせよ、それが悔い無きようになるといふことでしょう。色んな出来事にぶつかり合いながら、悩みながら、苦しみながら、しかし本当に悔い無きように生ききつて欲しいと。そういう宿題を今も亡き人からいただき、その宿題を果たす為に、毎日毎日色んなことに出会いながら、苦しんだり悩んだり、挫折したり、不安を抱えながらもその宿題を果さんが為にここに生きていっているのではないのでしょうか。

亡き方お一人お一人が、大切な道標となつておられる。それが参拝接待所に掲げられている「亡き人を案じる私が、亡き人から案じられている」という言葉、亡き人から案じられているのです、今私たちは。ここ

を日常生活の中でついつい忘れてい
るのですね。亡き人を案じる私だと
でも今も案じられている身だなあ
と。確かな言葉として語り掛けら
れている。皆さんの記憶に残っている
言葉、親鸞聖人や蓮如上人のお言葉、
そのお言葉一つ一つがこの私を案じ
てくれている。

く さ む す び

それはまず、私たちは一回限りの
人生だということ。そして必ず終わ
りが来るとのこと。そして一人つ
きりだということです。この命を一
人で生きなきゃならないということ
です。そして、誰もがその命をいつ
終えるか知らないということ。す
無常だということ。この限定を抱え
ながら今も生きている。だからこそ
本当に人として生きる意味が問
ただされているのではないでしょ
か。

例えば蓮如上人の『御文』の五帖
目十六通の「白骨の御文」の最後で
いいますと、

人間のはかなきことは老少不定の
さかいなれば、たれの人もはやく
後生の一大事を心にかけて、阿弥
陀仏を深くたのみまいらせて、
念仏もうすべきものなり。あなか
しこ、あなかしこ

蓮如上人が私たちに問いかけられて
いるわけでしょう。「後生の一大事」
をはつきりさせてくれよと語りかけ
られているでしょう。「人間のはかな
きことは」、あつという間に終わって
いきますよと。

先程申しましたように私も平均寿
命まで生きるとしたら十九年。あつ
という間に終わっていくな。その中
で先に亡くなった方々からの宿題を
どう果たしていくのか。その宿題を
持って亡き方々の処へ帰りたいな。
宿題を持ってです。出来たか出来な
かったではなくて、その宿題を持っ
て自分の人生を生ききる。先に亡く

なった方々に自分の人生本当に生き
きったよと宿題を提出したいと思
います。

最後になりますけれど、東田直樹
さんが言われた、「生ききる、残され
た人はその姿を見て人生を生き続け
る」、亡き人の姿を、記憶を大切なこ
ととして確かなこととして自分の人
生を生き続ける。今年親しい友人を
亡くしてその姿を見た時、生き様を
見た時、このことが確かなことだ
なあと。そして、それを受けて自分の
人生を最後の最後まで生き続けてい
く。そういう歩み。そういう縁、ご
法事という縁、あるいは報恩講とい
う縁、お通夜という縁、葬儀という縁。
何か普段私たちが忘れていたことに
もう一度真摯になる、真向きになる。
そういう時間と場所をですね。亡き
方々が私に一つ方向をですね、教え
てくれていると思っております。本
日はありがとうございます。

《編集後記》

◇本文は令和三年十月十七日、浄光寺
「報恩講」の法話録であります。洵に
勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集
させていただきます。

行事のご案内

「除夜の鐘」

日・令和四年大晦日
時・午後十一時半〜

「修正会」

日・令和五年元旦
時・午前零時

「除夜の鐘」の後、引き続き本
堂で「修正会」が勤まります。

「きこまいけ報恩講」

日・令和四年十一月二十八日
時・午後二時

※「きこまいけ」は十二月〜二月まで
冬休みをいただきます。三月二十八日
より再開いたします。



WEB サイト